

簡易版 TP (ティーチング・ポートフォリオ)

氏名	山下浩之
所属機関名	教育学部 初等教育学科
職位	准教授
在籍年	9 年

教育の責任

効率的に教師を目指す学生の体験不足を解消し、少なくとも理科に興味関心を抱く学生の量産である。

教育の理念

教育の責任でも触れたように、教育の理念は「効率的に教師を目指す学生の体験不足を解消し、理科に興味関心を抱く学生の育成」である。何度も触れているが、「体験」と「振り返り」という言葉こそ、自身の教育理念を表すキーワードである。そのために以下の2点を重視する。

- (1) 「体験」を重視する。
- (2) 学生に「体験」の振り返りを課す。

教育の方法・方針

「体験」と「振り返り」の重要性は明らかである。そこでどのような「体験」や「振り返り」を授業の中で提供しているか、について説明する。

「体験」については、各授業の中で実施している、模擬授業、標本作製、自然観察、カヌー体験、流速測定と体験、プレゼンテーションなどがあり、詳しくは講述の授業の中で説明する。

「振り返り」については、A6 サイズの罫線入り用紙に自己評価等を表記し、提出させている。それらの「reflection note」には全てコメントを打ち、新しい「reflection note」を追加して返却する。これを繰り返すと15回目の授業では15枚分を手にとることが出来る。つまり学生は以前の考え方と現在の考え方の比較が可能であり、教員側にとっては学生理解と評価の1手段になる。

教育の成果

(1) 「初等理科教育法」の場合

模擬授業を行った学生は「reflection note」の中で、大変だったと言う一方で模擬授業をしたことを好評価するケースが多い(資料9)。これは実際に「体験」を通しての達成感に他ならない。それと同時にさまざまな意見がでてくるが、教育の評価とは常に幅があることも授業の回を重ねるにつれて理解されてきた。また、毎週模擬授業を行って振り返りを重ねていくと先週議論になった内容は次の週には改善されているケースが多く、改善点は次の模擬授業に引き継がれることが多い。振り返りの効果は、同じ教室内で培われた改善点は模擬授業文化として受け継がれ、後半になればなるほど既成の改善点は克服され、新たな改善点のみが議論されるようになっていくことである。たとえば授業前の安全管理についての確認方法が指摘されたとする、次の模擬授業からは安全管理についての指導が徹底するといった具合である。

主に模擬授業を行った学生が

「模擬授業は大変だったけど、授業をして本当によかった。」
という声をよく聞く。また模擬授業を人数の都合で行えなかった学生からは
「模擬授業の授業者になりたかった。」

という不満も聞く。時間の都合で全員授業者にはできないとは弁解している。

コロナ対策でオンライン授業を余儀なくされた時期は、模擬授業をオンラインで配信した。
これについては学生の評価とともに加計教育 NO.34「道」(2020)に掲載されている(資料 10)。

(2)「探究活動Ⅰ」の場合

実際の植物腊葉標本における reflection note を資料 11 に挙げた。この自分自身の体験が将来の児童生徒に、体験を通してしか教えることができないものがあることを伝えてくれればと思う。実際には

「葉にはそれぞれ個性があり、ポンドが乗る葉とそうでない葉があることがわかった。」

「葉にほのかな桜餅の香おりがした。」

など感覚を伴った評価がある。エピソード記憶としての知識・理解が読み取れる。

(3)「探究活動ⅡA」の場合

カヌーを教育学部の授業に取り入れている大学はおそらく岡山理科大学のみであり、体験型の教員養成を目指す学部の方針に極めて沿っていると言える。これはメディアも取り上げ、これまでに NHK テレビ、RSK テレビ、テレビ瀬戸内、読売新聞等が報道した(番組名、報道日時については資料に記入)。座学で豊富な知識を得るより乗れることが(つまり体験が)どれほど価値があるかを学生自身が学び取ることを目指している。

カヌー実習を終えての感想を資料に挙げた。また、これまで学部開設からのカヌー実習に深く関わって下さっている岡山カヌースクール本谷光円氏の師匠であるマホロバカヌーホンダスクール本田大三郎氏のコメントも抜粋した(資料 12)。常々「岡山理科大学」の名前を出して励ましていただいている。

(4)「フィールド観察実習」の場合

フィールド観察実習も、参加した学生の評価は極めて高い(資料 13)。これは単に知識ではなく、自分自身で消化した応用可能な知識になっているからであると確信する。たとえば河川の流速測定と同時に感じる水流の圧力や体感水温(触覚)、礫や砂が皮膚表層に当たるときの感触、層流時と乱流時の音の違い(聴覚)、流勢(視覚)など、得たい情報に付随してくる近傍の情報が付加されてくる。知識とはこうした近傍の情報を基にしたエピソード記憶のサイズに依存しており、思考過程で最も重要と言われているイメージ化を促進させる。

これまで学生は消化不良を起こすことが多かった高等学校までの授業でイメージ化が図られなかった最大の理由は、「体験」を通じた知識・理解になっていなかったことにあると思われる。

今後の目標

○教材開発研究を継続的に行い、研究実践集を発行発刊する。

○教師として活躍する卒業生と共同で研究開発を行い、開発と実践を通して教材の grade up を図る。

根拠資料

「reflection note」他